日刊ゲンダイ　DIGITAL

追悼・PANTA さん（頭脳警察）時代に抗い続けた反骨のロック魂

公開日：2023/07/12 06:00　更新日：2023/07/12 06:00

PANTA さん（C）

ロックミュージシャンの PANTA（本名・中村治雄）さんが 7 月 7 日、10 時 44 分、肺がんによる呼吸不全と心不全のため、清瀬市の病院で死去した。享年 73。

PANTA さんといえば、常に「過激」というイメージがつきまとう。ギター＆ボーカルの PANTA さんが TOSHI（石塚俊明）と共に「頭脳警察」を結成したのは 1969 年。東大闘争、日大闘争を軸にした全共闘運動が全国の大学で燃えさかり、70 年安保を前にした「政治の季節」だった。

PANTA さんは赤軍派の「世界革命戦争宣言」をステージでアジテーションするなど、ベトナム反戦運動高揚期の学生たちを熱狂させた。世界革命戦争宣言の一節は「ブルジョワジー諸君！　君たちにベトナムの民を好き勝手に殺す権利があるなら、我々にも君たちを殺す権利がある」という過激なものだった。71 年に三里塚芝山連合空港反対同盟・青年行動隊が主催した「幻野祭」では「銃をとれ」を熱唱し、72 年発表のファーストアルバム「頭脳警察 1」は政治的かつ過激な歌詞によって発売中止になり、「頭脳警察セカンド」も発売 1 カ月で発売禁止勧告を受けて回収された。その時、「事件は音楽の中の警察が取り締まるべきだ」と頭脳警察を擁護したのが寺山修司だった。

2008 年に寺山の「時代はサーカスの象にのって」を劇作家・演出家の高取英の補作詞で PANTA さんが作曲し CD リリースしたのは寺山に対する返礼だった。歌詞の一節「戦争と戦争の間に私たちはいるそれを忘れることはない」という部分が PANTA さんの心を揺さぶったという。母が従軍看護婦で、戦後、病院船・氷川丸で命からがら帰国したことと無関係ではない。

反体制ロックミュージシャンとして若者に熱狂的に支持されたが、PANTA さんの基調はイデオロギーではなく、生きとし生けるものに対する愛=ヒューマニズムだった。それが権力によって侵され、差別され、排除されることに対する怒りと反骨精神が歌の底流にある。PANTA さんは本来の意味の自由主義者=リベラリストであり、ロマンチストだった。日本赤軍の重信房子や娘の重信メイ、新右翼・一水会の鈴木邦男など交友関係は思想の左右を弁別することはなかった。

03 年にはイラク戦争開戦前のバグダッドに鈴木邦男、木村三浩（現・一水会代表）、元赤軍派議長・塩見孝也、雨宮処凛らで訪問。この時の体験をもとに、後にサダム・フセインの孫で 14 歳のムスターファが父やボディーガードがアメリカ軍に殺された後も 1 時間にわたって銃撃戦を繰り広げ、射殺された史実を歌った「七月のムスターファ」を作っている。

「音楽は国境も民族も宗教も超越する最強のもの」

反原発デモに仲間と集結（2012 年）／（提供写真）

ロック界のカリスマでありレジェンドでもあるにもかかわらず、偉ぶることなく誰に対しても分け隔てなく接し、時に若いミュージシャンの才能を引き出すプロデュース役も買って出た。

荻野目洋子をプロデュースし、沢田研二、石川セリ、堀ちえみ、岩崎良美らに楽曲を提供するなど間口は広く、ロックのみならず音楽業界、映画界、演劇界にも豊富な人脈があった。

3.11 の福島第 1 原発事故後の経産省前反原発デモにもファンやミュージシャンと共に参加。私も何度も同行したが PANTA さんは気負うことなく「みんなでお散歩に行こうか」と飄々としていた。

1990 年代に、高取英に引き合わされた時も、まるで昔からの友だちだったかのようにフランクに接してくれた。PANTA＆HAL の名盤「マラッカ」「1980X」のレコードを擦り切れるほど聴いた私にとって雲の上の人だったが、出会ってから 30 年近く、友人のひとりとして時に密な交流をしたことは望外の幸せだった。

5 年前に高取（享年 66）が、そして私が橋渡し役となって、PANTA さんが音楽を担当した水族館劇場の桃山邑氏（同 64）が相次いで亡くなり、まさか PANTA さんまでとは……。

6 月 14 日が最後のステージとなり、19 日に再入院した後もアルバム制作に意欲を燃やし続けた。

時代に抗い続けたその反骨の ROCK 魂。終わりの時まで現役の「ROCK 屋」としての人生を全うした PANTA さん。

「音楽は国境も民族も宗教も超越する最強のもの。それを経済活動に利用されたくはない。ロックはあくまでも“反”であるべきなんだ」

そう言ってにっこり笑った PANTA さん。人は死んでも歌は滅びない。 合掌

（山田勝仁／演劇ジャーナリスト）

FRAIDAY DIGITAL

「未来はね。なるようになる」…追悼・伝説のバンド「頭脳警察」PANTA が見ていたコロナ後の世界

2023 年 07 月 08 日

「頭脳警察」の PANTA さん

7 月 7 日、’70 年代の反体制の象徴として知られる伝説的ロックバンド「頭脳警察」の PANTA（ぱんた、本名中村治雄）さんが亡くなった。死因は肺がんによる呼吸不全と心不全で、73 歳だった。

‘69 年、PANTA さんは同年の TOSHI と「頭脳警察」を結成。「ロックは不良」といわれた時代に、学生によって激化した政治活動を扇動するかの如く、政治に過激な歌詞やライブパフォーマンスによって、「左翼のアイドル」として祭り上げられた。しかし、多くのライブ活動が中止に追い込まれ、中でも、’70 年の日劇ウエスタンカーニバルで PANTA さんが舞台上で自慰行為を行った“事件”は、日本ロックコンサート史上の伝説となっている。バンドは’75 年に解散するが、’90 年に再結成した際には、『FRIDAY』は２人にインタビューを行なっており、

〈「頭脳警察」にはライバルも先輩もいなくて、日本語のオリジナルなロックを手探りでやってきた。『自分の演りたいもの=時代の要請』だと思ってやって来たんだ〉

と語っていた。’80 年代からは、荻野目慶子やチェッカーズ、沢田研二に楽曲提供したり、プロデュース業にも力を入れた。

そして、’20 年 7 月、『FRIDAY』は「頭脳警察」の結成 50 年を記念したドキュメンタリー映画『zk／頭脳警察 50　未来への鼓動』の公開を機に、30 年ぶりに PANTA さんにインタビューを敢行。デビューからの 50 年、コロナ禍における現在。そして、未来についても語ってくれた。再録してご紹介したい（記事中の年齢・肩書きは掲載時のものです）。

「絶景かな」伝説のバンド「頭脳警察」PANTA が見ている未来

「『絶景かな』ですよ。まさに、今の気持ち。今、生きてここから見ているこの景色が『絶景かな』だと」

結成 50 年を記念したドキュメンタリー映画『zk／頭脳警察 50　未来への鼓動』が公開中の伝説のバンド「頭脳警察」。PANTA は、こう言う。

「コロナで、日本だけじゃなく世界中が不自由になっている。音楽も思うようにできない。これ、チャンスですよ。だって世界中が同じスタートラインに立って、まだ、一歩も踏み出せない。せいぜい半歩踏み出したばかりだから」

1969 年、PANTA は同い年の TOSHI と、バンド「頭脳警察」を結成した。

オリジナルであること、自由であること

「ダサくても、下手でも、オリジナルなものがやりたい。そのころの日本の音楽ってね、青春？なんか、薄っぺらい歌詞だったの。17 歳から曲を作り始めて、100 曲くらい、全部英語の歌詞だった。でも、欧米に対抗するにはこれじゃダメだ、自分の言葉で歌おうと思った。そうしたらいろんな言葉が生まれてきて、よし、これで一矢報いたいと、頭脳警察として活動を始めた。そんなとき『世界革命戦争宣言』を知って、これを歌にしようと。ウイスパーでささやくように歌おうと思ってたんだけど、日比谷野音のステージに上がったら、頭に血がのぼっちゃって叫んでた。一瞬のスパーク。ラップみたいに。そうね、日本で最初のラップかも」

時代のアジテーターとして学生たちから圧倒的な支持が

これが、伝説の第一歩となった。SNS のない時代、頭脳警察の存在は口コミで全国の学生たちに広まった。

「北海道から九州から、日本中の大学で歌ったよ、でも、あの歌は、1 日に 3 回も歌うもんじゃない」 1970 年ごろの頭脳警察、PANTA と TOSHI。学園祭では、観客からの投石やステージからの挑発があり暴動状態になることも。常に熱狂になかにいた

　　安保反対、ベトナム戦争反対――国会議事堂前や学生街だったお茶の水界隈で、学生と機動隊が衝突。石を投げ、放水を受け、東大安田講堂では学生たちが立て篭もるなど反戦反体制の嵐が吹き荒れていた。

「自分は正しい。周りはみんな敵くらいに思ってた。危険な正義感だよね。でも、自分が正しいと思ってるから『ふざけるんじゃねえよ』って。『くそったれ馬鹿野郎』なんて歌詞はそのころの日本の音楽にはなくて、でも、アメリカでは『FUCK』って歌ってるんだよね、ロックは。今思うとさ、若気の至りなんだけど、世の中も自分自身も苛立って、闘ってた。ニュースにもできないような事件もいっぱいあった」
頭脳警察のステージは、演奏中に投石があり、舞台からの挑発があり、客席は乱闘で血だらけと常にスキャンダラスだった。1972 年にリリースした1stアルバムは発売禁止。2枚目も放送禁止から回収、発売禁止になった。が、その過激な歌詞を自由なメロディが若者たちから圧倒的な支持を受け、学生運動のアイコンになる。
「嫌になっちゃったんだよね。左翼のアイドル。イメージが固定しちゃうことに疲れちゃった。で、解散しました」
PANTA は、ソロ活動をしつつアイドルのプロデュースを手がけるなど「遊んじゃった」という。

いつだって、時代のほうが合わせてくる

「ソロで『RED』ってアルバム作って、ライブしようとしたら、一緒にやるのにしっくりくるのが頭脳警察の曲だった。じゃあ、っていうんで、１年限定で再結成をしたら、昭和が終わったんだよね」
1990 年、頭脳警察の再結成のライブを FRIDAY 本誌は取材している。そのときのインタビューで PANTA は「時代が、おれに合わせてくるんだ」と語っていた。

FRIDAY1990 年７月 20 日号に掲載された「頭脳警察再結成」の記事。復活ライブのステージは過激でスリリング。PANTA と TOSHI が喧嘩になったことで、アンコールはなかった

「このときのツアータイトルは「万物流転」、人間てさ、馬鹿なことばかり繰り返すんだよね。世の中なにも変わらないなって」
それから 10 年を経て、頭脳警察は、今度は3ヶ月限定の再再結成をする。
「きっかけは、なんだったかな。とにかくまた、TOSHI と『最終指令自爆せよ』っていうタイトルでツアーした。ツアーファイナルの５日後、9.11 が起きたんだ」
そして 2019 年、この伝説のバンドは結成 50 年を、PANTA と TOSHI は、それぞれの音楽活動を重ねながら 70 歳を迎えた。

2019 年から若手の実力派が参加、６人編成で活動している。左からベース宮田岳、キーボードおおくぼけい、PANTA、TOSHI、ドラム樋口素之助、ギター澤竜次

「ドキュメンタリー制作が始まって、50 周年プロジェクトで１年間、イベントやあちこちのステージを映像に残して、２月２日に古稀祝いのライブをやって。そうしたら、自粛だよ。これ、１年か半年か遅かったら、ライブはできないし、撮影もできなかったよね。ぎりぎりのタイミングだった」
その記録映画のエンドロール用に書いたのが新曲の『絶景かな』。撮影は3月末に、人気のない渋谷のライブハウスで行われた。

「いろいろ能書き垂れてきたけど、今までよく殺されずに済んだな。とにかく今、君と見ている未来は絶景かな、っていう歌。コロナの前に書いたんだけど、まさに今、そういう気持ち」
活動を停止していたバンドは7月、無観客で配信ライブを行った。
「配信なんてね、ライブに対する背信行為じゃないかって。けど、功罪問わず、まずはやってみようと。やって悔やめの精神でね。最初で最後のつもりだったんだけど、実際にやってみたら課題がたくさん見つかった。やりたいことがたくさん見つかったんだよね。
ミュージシャンもスタッフも、できることはたくさんある。若手も、サザンも（山下）達郎も配信にトライしてる。エネルギッシュだよ。どんどん進化していくよね。非合法なことは別として、なんでもありなんだ、今」

未来は、希望に満ちている

「世界は、もう元には戻れませんから。音楽も出版も、全部。今、世界中がスタートラインに立って、進化していく。面倒だけど、元には戻れない以上、進化するしかないでしょ。大きく変革していくんだよ、みんなで。未来はね、なるようになる。自分も他人も自由に解き放って、この素晴らしい世界をさ、絶景かなって眺めながらね」

「なんで？なんで？と、いつも思っている。疑問がね、次々に湧いてくるんだよ」PANTA を動かしているのは、好奇心と情動。それを自分の言葉で歌い続ける
PANTA の語り口は、やわらかく熱い。歳を重ねたからではなく、これが、この人の本質なのだ。
「オリジナルでいたい。自分の言葉で歌いたい。今、歌いたいことがたくさんあるんだよ」
音楽界が急激にシュリンクしたコロナ禍にあっても、PANTA には、抑えがたい情動と、なにか、希望が見えているようだった。

ご冥福をお祈りいたします。